

第Ⅰ部 地域文化遺産の情報化

石清水八幡宮の二つの大砲

—地域文化遺産と文化情報学—

東 昇

1. 地域文化遺産と文化情報学

本書に含まれる古文書の調査、聞き取り、地図のトレース、翻刻、統計表、地図化は、いずれも情報化の一手法である。この情報化は、研究の基礎的な作業であり、新しい学問である文化情報学は、調査、整理、記録の方法を確立し、どのように分析できるかを示すことが重要な課題といえる。これまでにも文化情報学関連の研究では様々な手法が紹介された⁽¹⁾。しかし、それらの研究では各分野の手法を精密化するための史料分析であり、史料の背景にある人や地域が取捨されているように感じる。分析史料は単なる資料であり、地域文化遺産ととらえられていないのが原因と考える。

そこで本研究では、地域文化遺産につねに向き合う地域の人々と連携して研究を進めた。これまで私自身が、各地の自治体史編纂の嘱託、博物館学芸員を経験したなかでたどり着いたのは、地域に根ざし、地域を歩き、地域を知り尽くす力、絵画や建築、古文書など個別の文化遺産の調査、研究ではなく、人や地域を単位とした複合的な視点を持つという考え方である。これは文化遺産学コースの目標の一つでもある。そのため本書ではできる限り各調査、情報化の手法を詳細にわかりやすく記すように心がけた。そして情報化された史料を、どのように分析、研究するか。そしてどのように地域へつなげていくか、つぎの課題となる。今回の石清水八幡宮の絵図の分析を、その一つの試作として提示してみたい。

2. 絵図にみる近世から近代の変化

第Ⅳ部「絵図の情報化」の「近世から近代の八幡宮案内図と案内記」において、幕末から明治にわたるつぎの3枚の八幡宮案内図を比較している(111~113頁)。

A 慶応2年(1866)「城州八幡山案内絵図」(個人所蔵)

B 明治11年(1878)「山城国綴喜郡男山八幡宮全山図」(八幡市教育委員会所蔵)

C 明治43年(1910)「官弊大社男山八幡宮全図」(個人所蔵)

絵図の同じ部分を分割し比較してみると、幕末から明治へと時代が進むにつれて、様々な変化をみることができる。まず絵図上の文字が減少する。分割図1や4の本宮付近はあまり変化しないが、2「神應寺、瀧付近」・3「一ノ鳥居付近」・8「豊藏坊、松花堂」は激減している。これは幕末まで存

在した各坊や仏教施設が、明治初期の神仏分離、廃仏毀釈で消滅したためである。つぎに B 以降では、明治の近代化が描かれている。長志珠絵氏が京都の三宅八幡宮の絵馬を分析した研究で、近代の風俗が「記号」として描かれていることを指摘している⁽²⁾。同じように絵図を拡大して

観察すると、小学校（図①）、シルクハットの男性（図②）などが登場する。八幡荘の元戸長の家に伝わる明治8年「日記」に、5月1日山上闕伽井坊の裏座敷を小学校へ移築し、八幡荘内の会議所として利用したとある⁽³⁾。廃仏毀釈で不要となった坊を、近代化の象徴といえる小学校へ移し、新しい行政施設に転用したことがわかる。そして C では参詣者の数も減少し、人間の大きさが神社の施設に対して小さくなり、雲煙が立ちこめている（113頁）⁽⁴⁾。八幡宮本殿が雲の上に浮かぶ宮殿のように描かれ、莊厳さを強調している。

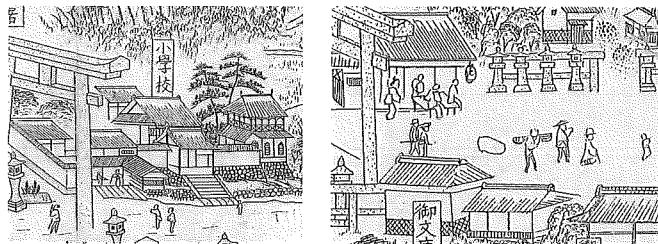
この八幡宮案内図の比較により、八幡宮は近世においては参詣、遊山の対象（A）であったが、明治に入り近代の国家神道の担い手として莊厳な宗教空間の形成を指向（C）していくと考えられる。B の場合は、A の系統と位置づけることができるが、鳥羽伏見の戦による高良社の焼失（図③）など戦災や神仏分離、廃仏毀釈後の姿が描かれており、Cへの流れをみることができる。

3. 描かれた戦利品、八幡宮の莊厳化

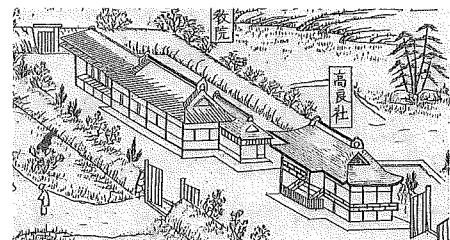
分割図7(127頁)のC三ノ鳥居の下に「戦利品」と記された大砲がある（図④）。この大砲は A（図⑤）、B（図⑥）のいずれにも描かれておらず、三ノ鳥居と常夜灯の間は広場である。大砲は、麓からの階段を登り切ったところにあり、参拝者に砲身が見えやすいように設置されている。戦利品は麓の二ノ鳥居の脇にもあり（図⑦）、どちらも鳥居に近く目立つところに設置している。こちらの戦利品は何

を描いたものか不明瞭である。

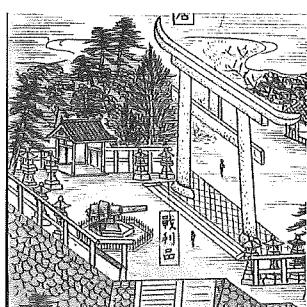
この戦利品の大砲について、石清水八幡宮でまとめられた「一ノ鳥居から御本殿まで一神馬舎（下）」につきのように記されている⁽⁵⁾。この大



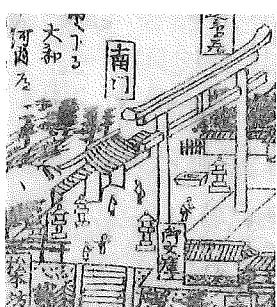
図① 知周校（小学校） 図② シルクハットの男性と警察官



図③ 焼失した高良社の廻廊



図④ 「戦利品」の大砲



図⑤ 幕末の三ノ鳥居付近

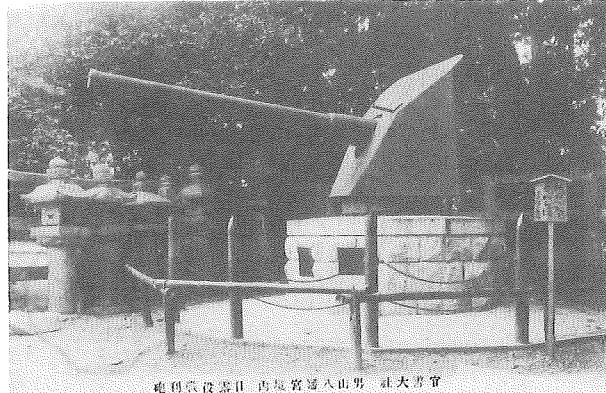


図⑥ 明治11年の三ノ鳥居付近

砲は日露戦争の戦利品であり、明治42年に陸軍省から献納されたロシア軍の45口径12cm速射カノン砲であった。この大砲は旅順要塞開城後に日本軍が戦利品として持ち帰ったものであった。解説には三ノ鳥居の12cm速射カノン砲の図面も掲載されている。そして二ノ鳥居の戦利品も明治40年に献納されたもう一つの15cmカノン砲であった。その後昭和19年の金属供出まで同地に設置されたとある。戦後、八幡宮の山に入った方の話によると、大砲の残骸が山中に散乱していた記憶があると語っている。供出後に一部使用できない部分が廃棄されていた可能性もある。

この大砲の写真が絵葉書「官弊大社男山八幡宮境内、日露役戦利砲」

(大梅克義氏所蔵)として現存している(図⑧)。年代は不明であるが、大正6年12月男山八幡宮から石清水八幡宮へ改称することから⁽⁶⁾、設置された明治42年から大正6年までの画像と考えられる。

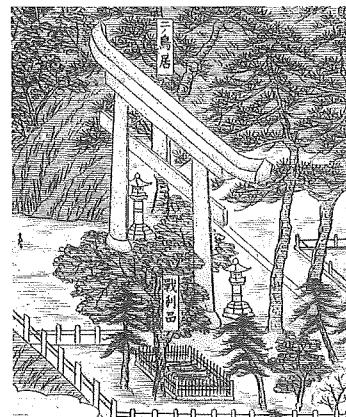


図⑧ 大砲の絵葉書

なぜ二つの大砲が存在するのか、実は最初の大砲にある問題があったためである。二ノ鳥居の大砲は何を描いたものか不明瞭であるが、これは破壊された大砲であった。陸軍省の明治42年9月「戦利品下付ノ件」には、男山八幡宮宮司田中俊清から陸軍大臣寺内正毅に宛てられた同年4月15日「三十七八年役戦利砲下附願」が収められている⁽⁷⁾。田中俊清は「当宮ハ古來帝国第二ノ宗廟ト称シ」と書き出し、武神、文永弘安の役の祈願や文久の孝明天皇他45回の行幸など八幡宮の由緒を記している。続けてつぎのように記す。

当宮ヘモ一五珊瑚速射加農砲々身外雑品等ヲ下附セラレ、右砲身ハ目下据付工事中ニ有之候、而シテ破壊廢残ノ砲コソ却テ好箇ノ記念トハ存候ヘ共、何分現品非常ニ破壊シ砲架等モ無之ヲ以テ其形容壮大ヲ欠キ、隋テ人ノ注視ヲ惹キ難ク大社ノ莊嚴ヲ加フル事薄ク、參拝者ヲシテ忠誠ノ感念ヲ喚起セシムルノ功乏キヤニ相考ラレ候、加フルニ京都ニ於ケル豊國神社、神戸ノ湊川神社等ノ數社ヘハ御省ヨリ特ニ完美ノ巨砲ヲ献納セラレ据付工事等モ完成セシメラレ候例モ有之候ヘハ、当宮ヘモ特別ノ御詮議ヲ以テ更ニ砲架等完備ノ巨砲一門御下附被成下候ハゝ、一層御祭神ノ威稜ヲ發揮シ国民志氣ヲ鼓舞ニモ大ニ効力アリト確信仕候

八幡宮へ下付された15cm速射カノン砲は破壊品であり、壮大さを欠き人目を惹かず、大社の莊嚴にもならず、参拝者の忠誠心も喚起しないとある。そして豊國、湊川神社に下付したような完美の巨砲があれば、祭神の威稜を發揮し国民志氣の鼓舞に効果があると書いている。要約すれば以前下付された大砲の見栄えが悪いので、新たに完形に近い大砲を下付して欲しいという内容である。



図⑦ ニノ鳥居付近の「戦利品」

続けて同年4月21日京都府知事大森鐘一も寺内正毅宛に、この八幡宮の願を受け、「該宮ニ対シ殊ニ壞残セル巨砲ヲ御交付相成タルハ深キ御趣旨ノ存スル義ト存候、然ルニ該宮ハ男山ノ丘陵ニ依リ社頭ノ形勢宮殿ノ結構宏大ナルヲ以テ、本願ノ通更ニ形容壮大ナル完美ノ巨砲ヲ御下附相成候ハゝ、從前ノ壞残慘烈ナルモノト相須テ各社頭ノ莊嚴ヲ加ヘ、國民ノ志氣ヲ鼓舞スル義ト存候条」と記している。八幡宮の願を伝える一方で、破壊された大砲の下付は考えがってのこと、完美なものと破壊された2門の相乗効果を述べており、陸軍省に対しても一定の理解を示すような姿勢であった。

これに対して陸軍省は検討の結果、45口径12cm速射カノン砲1門を八幡宮へ送付することを決定した。陸軍兵器大阪支庁からの送付となり、荷造・運搬費は八幡宮の負担であった。文書に貼り付けられた指示書と思われる紙には「戦用トシテ必要ナケレバ戦利品トシテ男山八幡宮ヘヤリ度」と抹消された文言があるが、戦争に使用しない大砲を下付用にしたと推測できる。

4. 絵図の分析と文化遺産の情報化

このため当時の八幡宮には、二つの戦利品の大砲があったが、一つは大砲であるにもかかわらず不明瞭に描かれたと考えられる。そしてC「官弊大社男山八幡宮全図」の発行者は、戦利品下付願を提出した田中俊清である。前述したように八幡宮案内図の比較により近世末から近代にかけて、八幡宮は参詣、遊山の対象から、国家神道の担い手として莊厳な宗教空間を形成していく様子がうかがえると記した。これは戦利品下付の際にも「大社ノ莊嚴ヲ加フル事薄ク」「社頭ノ形勢宮殿ノ結構宏大ナル」という言葉に表れており、この時期の八幡宮の方針を示しているといえる。八幡宮は、「帝国第二ノ宗廟」、武神などの中世以来続く由緒を利用し、明治初期の鳥羽伏見の戦災、神仏分離や社領上地による大きな変化（宗教的地位、経営基盤の喪失）などに対応していたと考えられる。この八幡宮の方針が、案内図にも巧みに描かれていたといえる。

このように八幡宮絵図、個人所蔵の文書、絵葉書、陸軍省の文書など、さまざまな文化遺産を調査、記録、情報化することにより、そこにあるデータが比較可能となり、新たな文化遺産の価値を見いだすことができるのではないだろうか。この分析の結果を、八幡宮を含めた八幡地域の文化遺産の調査、活用に生かせるかどうか。今後の文化遺産のさらなる情報化、比較によって、より近づけると考えており、次年度への課題としたい。

(註)

- (1) 安澤秀一、原田三朗編著『文化情報学 人類の共同記憶を伝える』、北樹出版、2002年。村上征勝編『文化情報学入門』勉誠出版、2006年。
- (2) 「近代絵馬群へのまなざし 洛外村社と民俗・近代京都」丸山宏、伊従勉、高木博志編『近代京都研究』思文閣出版、2008年、266～269頁。
- (3) 個人所蔵文書。
- (4) 堀田典裕氏は、「洛中洛外図屏風」などに描かれた雲煙が、吉田初三郎の鳥瞰図には鉄道の線路を結ぶこ

とに起因して消えている。また近景から遠景まで一つの連続した風景として描く手法をとると指摘している。八幡宮案内図も鳥瞰図であるが、この流れを逆行している。『吉田初三郎の鳥瞰図を読む—描かれた近代日本の風景』河出書房新社、2009年、96頁。

- (5)「石清水アラカルト」(100)。
- (6)京都府立総合資料館編『京都府百年の年表』6、宗教編、1970年、185頁。
- (7) 壱第713号「壹大日記」、「陸軍省大日記」、防衛省防衛研究所所蔵。国立公文書館アジア歴史資料センターで公開されているデータベース (<http://www.jacar.go.jp/>) による。

表紙解説

	1 2 3
5 (裏)	4 (表)

- 1 石清水八幡宮本殿楼門の内部
- 2 慶長5年5月25日「徳川家康朱印状」部分（木村家文書）
- 3 木村家の土蔵にて古文書を説明する故木村富彦氏
- 4 石清水八幡宮本殿楼門、背景に神紋
- 5 石清水八幡宮、鳩八幡宮・神紋

配色は、2009年3月「平成の大修造」により、鮮やかによみがえった石清水八幡宮本殿楼門の朱色を基準とした。

（写真提供 2, 3 八幡市教育委員会、1, 4, 5 石清水八幡宮）



京都府立大学文化遺産叢書 第3集

八幡地域の古文書と石清水八幡宮の絵図

—地域文化遺産の情報化—

編 集 東 昇（京都府立大学文学部歴史学科准教授）
竹中 友里代（八幡市ふるさと学習館主任学芸員）
発 行 京都府立大学文学部歴史学科
〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町1-5
発行日 2010年3月31日
印 刷 株式会社 春 日
〒630-8126 奈良市三条栄町9-18